

『帰ってきたゲームセンターあらし』（仮題）シナリオ（案）

※セリフ過多なので、コマ割りする際にカットします。

すがやみつる

◎東京・お台場のゲームスタジアム（全景・夜）

N「2019年1月、東京・お台場——」

東京・お台場に建設された巨大スタジアムの全景に、ワーワーワーという大歓声がかぶる。

アナウンサーの声「さあ、今夜、いよいよ2019年度eスポーツ・グランプリシリーズの第1戦が、これより開幕です！」

◎スタジアム内

観客席後方に並ぶ大型ディスプレイには格闘ゲームの画面が映し出されている。

ステージ上には、ゲーム機のコントローラーに向かい、レバーとボタンを操作するゲーマーたちが並んでいる。

アナの声「グランプリシリーズで日本チャンピオンになったゲーマーは、アメリカのラスベガスで開催される世界チャンピオン大会への出場権を得られます！」

ゲーマーたちのアップになって、

アナの声「日本チャンピオンの賞金は5000万円！ 世界チャンピオンには500万ドル（6億円）という超高額の賞金が懸けられています！」

実況席でマイクに向かうアナウンサー。

アナ「さあ、日本チャンピオンを獲得して、世界チャンピオンへの権利を獲得するのは誰か？ いまは、予選第1組の8人が戦いの真っ最中！ この中で誰々

決勝に進めるのは、1位になったゲーマーだけ！ さあ、トップになるのは誰かッ!」

と、声を張りあげたとたん、カッ！ と上空で閃光が炸裂する。

次の瞬間、閃光は、ゴワツ！ と轟音を発して巨大な火球と化した。

火球は、そのままスタジアム目がけてゴオオオオオオオオオオッ！ と音を蹴立てながら落下する。

火球は、そのまま、スタジアムのステージと観客席の間のグラウンドに、ドグワワワーン！ と爆発音を立てて突き刺さった。

観客「な、なんだ、あれは……?」

と凝視する観客たちの前で、シューウウッ！ と火球を包んでいた炎が消えていく。

観客「火が消えた！」

声をあげる観客の前で、パカンと球体の一部が開く。どうやらドアらしい。シルエットになって3人の人物が姿を見せると、ゲーム大会を中継していたテレビのクルーがカメラを向ける。

観客「ああああっ！」

観客「あれはっッ！」

観客たちは、大型ディスプレイに映し出された3人の顔を見て、絶叫する。

観客「ゲ、ゲームセンターあらしだあああああああ！」

観客「て、てえことは、残るふたりは、大文字さると月影一平太かッ！」

観客「つ、つまり、35年前に宇宙に旅立ったあらしたちが、いま、地球に戻って

きたってことか！」

スタジアム内にワーワーと響きわたる大歓声の中、あらしはキョトンとした顔で、

あらし「ここにいる人たち、みんな、おれたちのことを知ってるみたいだぜ」

一平太「た、確かに……（と周囲をキョロキョロして）しかも35年前だって……？」

さとする「宇宙船で旅をしている途中に、ひどいショックを受けたけど、あのとき時空の裂け目に吸い込まれたのかもしれない」

と、宇宙船がブラックホールのようなところに吸い込まれるシーンを想起。

一平太「（納得して）それで未来に飛んできちゃったわけか」

観客席からは「あらし！ あらし！ ゲームセンターあらし！」の大合唱。

あらし「（うろたえて）でも、なんだって、観客のみんなが、おれたちの名前を知ってるんだ？」

さとする「（前方上空を指さして）あのせいだ！」

聡が指さした巨大ディスプレイには、『ゲームセンターあらしカップ 20

19』の文字とともに、あらしの笑顔が映し出されている。

あらし「えええっ？ なんだって、おれの顔と名前がこんなところに……？」

と、その背後から、

声「お帰りなさい、あらし兄さん！」

あらし「え？」

と振り向いたあらしの前にいたのは、バリツとしたスーツに身を包んだ痩身の男性。年齢は40歳前後か。額の前髪はクルリと渦を巻き、口元からは一本の出っ歯が覗いている。

あらし「こ、この顔……！（赤ん坊の頃の弟とんがらしの顔を想起して）しかも、

あらし兄さん……ってことは、もしかして、お、お前は……」

とんがらし「弟のとんがらしです」

と、にっこりと笑って、

とんがらし「兄さんの名前を冠したこのゲーム大会は、eスポーツのチャンピオンを決定するイベントで、このぼくが主催しているんです」

一平太「主催者って……こんな凄いゲーム大会をか？」

と周囲をキョロキョロ。

とんがらし「幼い頃から兄さんの影響でゲームに親しんだおかげで、小学生の頃

から多くのゲームを開発するようになり、いまでは世界的なゲームメーカーを
経営するまでになりました。このゲーム大会は、ぼくが作ったゲームを楽しん
でくれるゲーマーたちへのささやかなお礼でもあります」

と、会場に並ぶゲームマシン、ゲームソフトの数々を見せる。

あらし「(ジタバタして) ささやかなお礼で5000万円もの賞金が出るなんて！
オレが出場したいくらいだぜっ！」

一平太「(しおれて) 宇宙の旅では、結局、ゲームなんてできなかったからなあ
……」

とんがらし「(ニヤリと笑って) ならば、出場してみますか？」

あらし「ええっ？」

とんがらし「このeスポーツ・グランプリには、オープン参加も可能。腕に覚え
がある人は、大会当日でも参加できるので！」

あらし「よっしゃあ！ ずっとゲームができなくてムズムズしてたんだ。まずは
腕慣らしで、予選をトップ通過してやるぜっ！」

と、ステージを見あげる。

観客席を囲むディスプレイには、格闘対戦ゲームの映像が映り、予選を戦う
ゲーマーが、ステージ上のディスプレイとコントローラーの前に立つ。

ステージ脇の審判員席に座るレフェリーが右手を上げて、

レフェリー「予選第1組、ゲームスタートーッ！」

ワーワーという歓声の中、ゲーマーたちがコントローラーに向かい、ゲーム
をプレイする。殴り、蹴り、突く戦いの様子を凝視するあらし。

あらし「(目を見張ってプレイの様子を見ながら) す、すげえ……。おれたちが
宇宙に行っている間に、ゲームは、こんなにも進歩してたのか……！」

あらしの様子を見ている一平太とさとる。

一平太「(微笑みながら) 長い間ゲームをしてなかったら、すっかり夢中になっ
てるぜ」

さとる「(不安そうな顔で) しかし、ゲームの進歩はすさまじい……。ぼくの知
識も35年前でストップしたままだ。あらしへのアドバイスもできそうにない……」

あらし、さとる、一平太の様子を見て、とんがらしがニヤリと笑う。

アナ「さあ、ゲームも進んで、予選も終盤。ここからは飛び入りのオープン参加
も受け付けます！」

ステージ上に向けて階段を駆けあがるあらし。ディスプレイとコントローラ
ーの前に立って、

あらし「ひさしぶりにゲームができるぜえっ！ さあ、相手になるのは、どなた
だい？」

と、その背後に黒い影がヌツと立ち、

影「お前の相手は、このわたしだよ！」

その声に振り向いたあらしが見たものは、インベーターが描かれツノの生え
たマスクをかぶり、巨乳を揺らしながら、マントを揺らして立つ女性の姿で

あった。

あらし「げげげっ！ お前はインベーダーウーマン！」

その様子を見て、

一平太「インベーダーウーマンといえば、あらしの母ちゃんじゃないのか？」

さとする「確かに、そのとおり」

一平太「でも、おれたちが宇宙に飛び立ってから35年も経っているのなら、あらしの母ちゃんだって、もう婆さんになっているはずじゃ……？」

ステージ上で、

あらし（ちがう……！！ このインベーダーウーマンは、おれの母ちゃんじゃないッ！）

インベーダーウーマン「ごちゃごちゃ言っていないで、さあさあゲームのスタートだよ！」

その声を待っていたかのように、

レフェリー「オープン参加部門の予選スタートーッ！」

その声と同時に、

あらし「うおおおおおおおッ！ ゲームだ、ゲームだあああああッ！」

と、コントローラーに飛びつく。

インベーダーウーマン「ホーホホホホ！ ゲームスタートよおっ！」

あらしとインベーダーウーマンが向かい合って対戦開始。コントローラーを操り、格闘に入る。

あらし「コントローラーのレバーとボタンの使い方は、予選の選手たちの操作を見て、バツチリ暗記済み！ それそれそれッ！」

あらしがコントローラーに両手を叩きつけると、画面のあらしが操作するキャラクターが、インベーダーウーマンが操作するキャラクターにキック、パUNCHを浴びせる。

あらし「お、おもしろッ！ 35年前には、こんなリアルなゲームはなかったぜ！

それ、それそれッ！ ひじ打ちに、ひざ蹴りだあーッ！！」

アナ「さすがゲームセンターあらし！ 超スピードで敵を攻撃！ それに対し、

防戦一方のインベーダーウーマン！」

インベーダーウーマン「ふふん！ 勝負は、これからよ！」

ダン！ ダン！ 長靴を履いた両脚を踏ん張ったインベーダーウーマンは、

胸元に手を入れて、シュバツ！ と何かを上空に投げ飛ばす。

上空に飛んだのは、巨大なブラジャーである。

ワーワーワーという大歓声の中、

アナ「インベーダーウーマンがブラを投げたあ！ これまで数多のゲーム大会にオープン参加し、優勝をかつさうことたびたびの謎の覆面ゲーマー！ 出るか、彼女の必殺技！」

そのアナの声に合わせるかのように、ブルンブルンと上半身を回転させ、巨大な胸を揺らす。

インベーダーウーマン「ほーほほほほほ！ くらええーッ！ 必殺ノーブラ

巨乳撃ちローラーッ

インベーダーウーマンの巨乳がギュワワーン！ と高速で回転し、コントローラーのレバーとボタンを叩く。とたんにインベーダーウーマンのキャラが、あらしのキャラにキック、キック、パンチ、投げを連発。

それを見て、

一平太「あれ？ インベーダーウーマンの必殺技は、ノーブラポイント撃ちじゃなかったか？」

とんがらし「ボインは、いまや死語。巨乳というのがトレンドイなんです」

ステージ上で劣勢のあらし。

あらし「うわわわっ！ こ、このままじゃやられる！ くそっ！」

キリッと顔を引き締めたあらしは、ダッ！ とジャンプし空中回転に入る。

あらし「月面宙返（ムーンサルト）リーローラーッ！」

空中でキュルルル……と回転し、コントローラーのレベルに向かって、

あらし「炎のコマーローラーッ」

ゴワアアッ！ と右手から炎が噴き上がるが、次の瞬間、ズッキイイイ

イン！ 右腕から電光が発生し、

あらし「ぐわわわあああああっ！」

と絶叫。

それを見て、

さとる「あらし！」

一平太「どうしたっ？」

ズダダダン！ とステージの床に落下するあらし。

あらし「いてててーっ！ う、腕が激痛で動かせないーッ！」

一平太「さとると一緒に階段を駆け上がりながら）な、なんだって？」

さとる「（あらしの腕を取って）骨折してる！」

あらし「そ、そんな……。いままで、ゲームで骨折なんかしたことがないのに！」

アナ「ゲームセンターあらし、まさかの骨折でダウン！ その間にもインベーダ

ーウーマンは攻撃の手をゆるめず、あらしのキャラをボコボコに！」

と、その様子を画面で見せる。

インベーダーウーマン「さあ、とどめだっ！ くらええーッ！ ノーブラ巨

乳撃ちクロスアタックローラーッ！」

巨乳をクロスさせてレバーを連打し、あらしのキャラを打ちのめす。

アナの声「（画面を見せながら）あらしのポイントゼロ！ あらし敗れました！」

インベーダーウーマン「ほーほほほっ！」

と勝ち誇る。

一平太「（あらしを介抱しながら）あらしが、こんなに簡単に骨折して負けるな

んて……」

さとる「理由がわかった」

一平太「え？」

さとる「宇宙船で無重力の宇宙を長いあいだ旅していたおかげで、筋力が落ち、

骨密度まで落ちてしまったんだ」

その様子を見ながら、

インベーダーウーマン（ふん！ このニセモノどもめ……！ 何が骨折よ。壊れただけのくせして……）

インベーダーウーマンの活躍する姿をスタジアムの遠景に重ねて、

アナの声「ゲームセンターあらしカップ2019 チャンピオンシリーズ第1戦は、予選から勝ち上がったインベーダーウーマンがダントツで優勝！ このインベーダーウーマンの快進撃にストップをかけられるゲーマーは存在するのかあッ!?」

◎高層マンション（昼）全景

◎同・50階の窓から見える広大なリビングルーム

豪華な調度品が並びリビングルームで眼を見張るあらし、さとる、一平太の

3人と、その背後で微笑むとんがらし。あらしは三角巾で右腕を吊っている。

とんがらし「骨折が治るまでの間、ここでゆっくりおやすみください」

あらし「こんな豪華な部屋に住んでいるのか、おまえは？」

一平太「まるで、さとるんちみたいだ」

とんがらし「このマンションは、そのさとるさんの家だった土地をぼくが買って建てたものです」

さとる「ええっ？」

とんがらし「さとるさんは大文字財閥の御曹司でしたが、残念なことに大文字財閥はもうありません。古臭い体質が災いしてビジネスがうまくいけなくなり、財閥は解体されて売却されました。ぼくもいくつかのグループ会社と、この土地を買わせていただきましたがね」

さとる「ぼくの両親は……？」

とんがらし「残念ながら行方不明です」

あらし「じゃ、さとるには帰る家がないってことか？」

とんがらし「そうなります。でも、ここに泊まってください。もともと、さとるさんの家でもありましたので」

と言って、テーブルの上のスマートスピーカーに顔を向ける。

とんがらし「OK！ グルグル。ゲームルームを開けて」

スピーカーの声「はい、わかりました」

奥の壁がズーンと開き、別の部屋が姿を見せる。コンピューターやゲームマシンがズラリと並び、まるでゲームセンターである。それを見て目を丸くするあらし、さとる、一平太の3人。

あらし「な、なんだ、このゲームだらけの部屋は？ まるでゲームセンターじゃ

ねえか！」

あらし「でも……（と冷静になって）、この部屋だけじゃなく……」

マンションの全景を見せて、

あらしの声「で、でも、なんだって、こんなデラックスなマンションを建てたり
住んだりできるんだ……?」

とんがらし「それは、ぼくが小学生のときに起業したゲーム会社が成功したから
ですよ。いまではIT系の事業も世界に展開して、日本でもトップ10に入る企
業グループに成長しているんです」

一平太「ITって何だ?」

さとる「くやしいが、わからない」と唇を噛む。

とんがらし「インフォメーション・テクノロジー……すなわちコンピューターや
ネットワークを使った技術のことですよ」

あらし「おれたちが住んでいた家は? 父ちゃんはどうした?」

とんがらし「お父さんは、認知症になって介護施設に入っています。お母さんは、
お父さんの認知症治の治療費を稼ぐために、プロゲーマーになりました」

あらし「お前は父ちゃんと母ちゃんの面倒を見てないのか?」
とんがらし「子どもの世話にはなりたくないそうです」

一平太「あらしの母ちゃん、本当だったら、もっと婆さんになっていいはずな
のに、何であんなに若いんだ?」

とんがらし「それは鍛えているからですよ」

と言ってテーブルの上のスマートスピーカーに語りかける。

とんがらし「OK、グルグル! ジムを映して」

スピーカー「ハイ、ジムヲ、ウツシマス」

の声と同時に、ヒュン! と音がして、壁にジムでウエイトリフティングの
トレーニングするインベーターウーマンの姿が映る。

あらし「げげげ! 母ちゃん、たしか60歳は過ぎているはずなのに!」

とんがらし「(スマートスピーカーに) OK、グルグル。声を聞かせて」

一平太「声まで聞けるなんて、プライバシーの侵害じゃないのか?」

とんがらし「このジムも、ぼくが経営しているところだからね」

壁に映し出されたインベーターウーマンは、こんどはバイクを漕ぎながら、
ブツブツと呟いている。

インベーターウーマン「何がゲームセンターあらしだ。あらしが宇宙に飛び立っ

たのは、もう35年も前のこと。35年前と同じ姿かたちで現れるなんて、あり得

ない。あらしもさとるも一平太も、とんがらしが作ったロボットか何かが決ま

っている!」

壁に投影されたインベーターウーマンを見ながら、

一平太「お前の母ちゃん、おれたちのことをロボットと思ってるみたいだぜ」

あらし「(とんがらしを見て) お前とも、いい関係じゃないみたいだな」

とんがらし「これも、あらし兄さんがいけないんです」

あらし「えっ?」

とんがらし「兄さんが、さとるさん、一平太さんと一緒に宇宙に飛び立った後、
お母さんは、ぼくのことを育児放棄して、ゲームセンターに入りびたりになっ

たんです。さみしかったんだと思います。お母さんは、ぼくのことよりも、手がかかってハラハラさせられる兄さんの方が好きだったんでしょね。そこでぼくは、小学生で自立する道を選んだんです」

あらし「そうなのか……35年の間に、いろいろあったんだなあ……」

と、そのとき、「ううう……」という声が聞こえてくる。

あらし「振り返って」ん？」

さとるが室内のパソコンやディスプレイ、ゲーム機を見て、身体を震わせている。

一平太「どうした、さとる？」

さとる「ぼくたちが宇宙に行っていた間に、コンピューターやゲームマシンがさまざまに進化している……」

とんがらし「ふふふ。35年前のゲーム機といえば8ビットのCPUがほとんど。

いまは64ビットCPUが普通で、ネット対応だから世界中のライバルと対戦ゲームができるんです」

あらし「おれたちは、宇宙に行ってる間に、とんだ浦島太郎になっちまったってワケか……」

とんがらし「そのとおりです。それでもeスポーツのグランプリシリーズに挑戦しますか？」

あらし「ぐぐぐ……！ よくぞ言ってくれたぜ、とんがらし！」

目に炎を宿して、

あらし「おれからゲームを取ったら何が残る？ もういちど挑戦して、あのイン

ベーターウーマンを撃ち破ってやるう！」

とんがらし「次の大会は1ヶ月後。まず骨折を治すのが先では？」

あらし「骨折なんて言っていられるかああッ！」

と叫ぶや、ガブリと出っ歯を腕の包帯に食い込ませ、ペリペリツと噛みちぎる。

さとる「ぼくも、新しい技術について勉強するぞ」

一平太「筋力と骨密度が落ちているのは、おれも同じ。こっちもトレーニングだあ」

と腕立て伏せをはじめ。

ゲームマシンに向かうあらしに、とんがらしが声をかける。

とんがらし「あらし兄さん。次の大会は、これを使ったゲームです」

と言って、VRゲーム用のゴーグルとコントローラー、さらにハンガーにかけたボディースーツ（ZOZOスーツのようなもの）を差し出す。

あらし「こ、これはっ！」

◎西東京ドームスタジアム（全景）――

◎同・場内――

ワーワーという大歓声の中、ステージ上でインベーターウーマンの前に立つ

あらし。

ふたりとも目にゴーグルをつけ、両手にはスティックタイプのコントローラーを持っている。

ステージ脇でマイクに向かうアナウンサー。

アナ「ゲームセンターあらしカップ2019の第2戦に正式エントリーしてきたゲームセンターあらしとインベーターウーマン。ともに予選から順調に勝ち進み、ついに、この決勝で再び激突！ さて、第2回大会の勝者は、はたしてどちらにっ!？」

あらしとインベーターウーマンが、身体に密着したボディースーツを着て立っている姿を見せて、

アナ「戦うのはVR格闘ゲーム！ すなわちバーチャル・リアリティ技術を使って仮想空間でゲーム同士が格闘するもの。しかも、打撃を受けるとセンサーが仕込まれたボディースーツが衝撃と痛みを伝える仕組み。実際にパンチやキックで戦うわけではないが、ショックと痛みは全身で感じます。頭や顔にも導電性のクリームが塗られているため、ショックが伝わります！」

ディスプレイのスコアボードを見せて、

アナ「試合は3分1ラウンド勝負！ 途中で1万点のHPが無くなったらKO負けとなりますっ！」

あらし「1ラウンドもかける必要はないっ！ 途中でノックアウトだーっ！」

バーチャルリアリティ（VR）空間で、ダツと床を蹴る3Dのあらしとインベーターウーマン。

インベーターウーマン「覚悟おしっ、このニセあらしめッ！」

あらし「げええ、母ちゃんは、まだおれのこと、ニセ者だと思ってる！」

さとの「(巨大ディスプレイに映る二人の映像を見ながら) バーチャル・リアリティ（VR）ゲームの内部は、確かに架空の世界。だが、操作しているのは、まぎれもなくホンモノ。インベーターウーマンには、そのことが理解できていないのだ」

ダダッ！ とジャンプするあらし。空中でクルクルと回転しながら、

あらし「この1ヶ月、骨折の痛みを乗り越えて筋肉をつけ、骨密度を増すトレーニングをつづけてきたんだ！ もう、お前なんかじゃ負けやしない！ くらえーっ！」

ズビビビッ！ あらしは空中で両手をすり合わせて摩擦電気を発生させる

と、

あらし「エレクトリックサンダーーっ！」

の絶叫とともに稲妻となった電撃をインベーターウーマンに浴びせかける。

インベーターウーマン「うおっ！」

身体をのけぞらせて電撃を避けたインベーターウーマンは、ダツとジャンプし、空中でブラジャーを投げる。

アナ「インベーターウーマン、巨大なブラを投げた！ さあ出るぞ、彼女の必殺技！」

インベーダーウーマン「空中から落下しながら胸を左右に震わせ」女の必殺技、ノーブラ巨乳撃ちooooooooooッ！」

あらし「(巨乳撃ちを左右の頬に受けて)グギヘギギャooooooooooッ！」

ズダダダダッ！ と背中からスッ飛ぶ。

アナ「あらしがぶっ飛んだ！ HPが一気に1000点減少ッ！」

一平太「あらしは、ゲームは得意でも、ケンカは得意じゃねえ！ これだったら、

おれが出た方が……」

さとり「いや、あらしは、そんなにヤワじゃない。見ろ……」

インベーダーウーマン「くらえ！ くらえ！ くらえッ！ ノーブライン撃ち

クロスアタックooooooooooッ！」

胸を身体の前で交差させ、あらしに襲いかかるインベーダーウーマン。

だが、あらしは、ギョワンギョワンと迫る攻撃を、顔面1センチくらいのことろでかわしている。

あらし「格闘技をふくめ、スポーツ全般は苦手だが、ゲームだと思えば話は別だ！」

ガッ！ 肘でインベーダーウーマンの巨乳を跳ね上げると、

あらし「真空ハリケン撃ちooooooooooッ！」

インベーダーウーマン「ぐああッ！」

と悲鳴を上げながら、渦の中に巻き込まれる。

アナ「インベーダーウーマンのHPが8800点に！」

インベーダーウーマン「なんの、これしき！ くらえええッッ！」

あらし「うおおおおooooooooooッ！」

インベーダーウーマンとあらしの激闘がオーバーラップで重なる。

アナ「ゲームセンターあらしと、一説には、そのあらしの母親といわれているイ

ンベーダーウーマンの母子対決！ いずれも一歩も譲りません！」

スコアボードの得点が、あらし、インベーダーウーマン共に減っていく。

アナ「(スコアボードの得点)インベーダーウーマン＝4800点、あらし＝5

500点)を見せて)残り時間は30秒！」

あらし「よおし！ グレートタイフーンで決着をつけてやるッ！ いっくぞッッ

ッッ！」

と、高々とジャンプ。

インベーダーウーマン「おっと、そうはさせるかい！」

グニューooooooooooッ！

インベーダーウーマンの胸が大蛇のように伸びて、あらしの身体に巻きつく。

インベーダーウーマン「必殺ノーブラ垂乳根(たらちね)締めooooooooooッ！」

ギシギシ……と音を立てて伸びた胸があらしを締め上げていく。

インベーダーウーマン「そーれえ！ ザークザクのバリバリのガンガラガンッ！」

あらし「(苦しんで)ぐきぎぎぎ……死むッッ！」

インベーダーウーマン「ロボットのくせして、何が死ぬよ。ロボットなら死んだ

りしない。ただ壊れるだけ！ それえええッ、ザークザクのバリバリのガン

ガラガン！」

アナの声「あらしの得点が下がる！ インベードーウーマン3600点、あらし2700点ーッ！」

スコアボードのあらしの得点が、2400、1900、1200……と下がる。

あらし「ぐびびび……。く、苦しい、ウンチが漏れる〜」

あらしの尻からズビズビ……。という音が聞こえ、

インベードーウーマン「え……。？ ウンチ？ ロボットが？」

と、うろたえた瞬間、

あらし「(キラリと目を光らせ) 隙を見つけたりーッ！」

スルリと巨乳の尻から抜けたあらし、ダツと空中にジャンプし、クルクルと空中回転。

あらし「くらえええーッ！ 真空ハリケン撃ちーッ！」

ギョワワワアアアアアアアンーッ！

真空ハリケン撃ちの空気の渦に巻き込まれ、吹っ飛ばインベードーウーマン。

インベードーウーマンのスコアを見せて、

アナ「インベードーウーマンのHPが一気に700点まで減少！ ゲームセンタ

ーあらしは1000点！ このままいけば、あらしの勝利は確定だ〜っ！」

一平太「いけつ、あらし！ 最後のとどめだあーッ！」

あらし「いくぞーッ！」

と右手を振りかざすが、そこでヒクリと動きを止める。

あらし(できない……。とどめを打てない……。！)

さとり「どうした、あらし？」

一平太「なぜやめる？」

あらし「インベードーウーマン……。いや、母ちゃんは、おれがウンチを漏らしそうになったことでホンモノの息子だっことに気づいて、攻撃の手をゆるめたんだ……」

一平太「母の愛ってことか？」

あらし「おそらくは……」

と、攻撃の手を休めたところに、

とんがらし「甘いぞ、兄さん！ ぼくたちの母は、そんなヒューマニストじゃないー！」

あらし「えい？」

と目を見開くあらしの身体に、シュルル……。と音を立ててインベードーウーマンのヘビのようなバストが伸び、ギョルルッ！ と絡みつく。

一平太・さとり「あらしっ！」

インベードーウーマン「ぬかったな、あらし！ ゲームの世界に情けは無用！ 勝負の世界は親も子もないのよっ！」

バストに絡まれたまま床にバンバンと叩きつけられるあらし。

あらし「ぐわあああっ！」

アナの声「インベーダーウーマン600点、あらし320点のスコアボードを見せて」インベーダーウーマン、起死回生の猛攻！あらしの得点が急減！このままじゃ逆転負けだっ！」

さとり「あらしが真の息子だと知って、さらに攻撃するのっ！」
一平太「ひ、人じゃねえ！」

スコアボードはインベーダーウーマン600点、あらし110点。

とんがらし「これが、ぼくたちの母の真の姿なんだ！」

あらし「倒れたまま苦悶の表情で」と、とんがらし！

とんがらし「な、なんだよ、あらし兄さん？」

あらし「おまえは幼い頃に、この母ちゃんに育児放棄されたと言っていたけれど、それこそが母ちゃんの誠の愛！子どもが一人でも生きていけるように、自立できるようにという愛のムチなんだっ！」

一平太「ぐぐぐ。自分の子を谷底に落として、自分で這い上がらせるライオンみたいなものなのか……」

あらし「(インベーダーウーマンとの戦いを回想して) おれは知ってる！母ちゃんが全力でおれと戦うのは、それが誠の愛ゆえなんだとな！」

うろたえるとんがらしに向かつて、

あらし「お前も幼くして崖から突き落とされたからこそ、世界に名前を知られたビジネスマンになれたんじゃないのか？」
とんがらし「(目に涙を浮かべて) うぐぐ……！」

その間にもスコアボードの得点に変化。インベーダーウーマン600点、あらし20点。

次の瞬間――

インベーダーウーマン「ふふふ……子どもが自立すれば親も自立できる。すなわち、本当は好きだったゲームに専念し、命もかけられるっもの！あたしだって、世界チャンピオンの称号が欲しい！老後も自立して生きるために必要な高額の賞金もねー！ーッ！」

と、胸であらしを空中高く放り投げると、床に叩きつけようとする。

インベーダーウーマン「くらえええー！ーッ！とどめのノーブラ垂乳根撃ちー！ーッ！」

背中から床に叩きつけられそうになりながら、

あらし「母ちゃん！命懸けで戦ってくれてサンキュー！おれは、その恩に報いるっ！でやああああー！ーッ！」

投げられながら身体を回転させたあらしは、上空で身体をドリルのように回転させ、

あらし「真空ハリケーン撃ちドリルアタッカー！ーっ！！」

あらしが身体をドリルのように回転させたため、インベーダーウーマンのバストと全身がギルギルと捻れ、そのままズダダダーン！背中から床に叩きつけられる。床は、砕け散る！

アナ「(スコアボードでインベーダーウーマンの得点がゼロになったのを見せて)

インベーターウーマン、ゼロっ！ あらしは9点！ ゲームセンターあらしの大
逆転勝ちーッッ

ワーワーワーという大歓声の中、立ち上がるあらし。

◎スタジアムのステージ上

ゴーグルをつけて立つあらし。その脇に同じくゴーグルをつけたインベーターウーマンが、バストをヘビのように伸ばしたまま倒れている。

ゴーグルに手をかけてはずすあらし。

目覚めたインベーターウーマンも上半身を起こす。

ゴーグルをはずしながら、

インベーターウーマン「よくぞ、ここまで育ったな、あらし……！ それでこそわた

しの 息子……」

スポツとマスクをはずすインベーターウーマン。

すっかりお婆さんになっているあらしとんがらしの母・ガラエ。

あらし「こ、これが、いまの母ちゃんの実の姿なのか……」

あらし「つまり、これがホントのバ・チ・ヤン・リアリテイってワケか」

あらしのセリフに、一同、コントのようにコケておしまい。

ナレーション「おあとがよろしいようで」

〈END〉